
Seet Life??

SORA

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

See t L i f e ? ?

【Nコード】

N 4 3 1 5 A

【作者名】

S O R A

【あらすじ】

いきなり現れたちよーかつこいい少年空。みんなが居る所じゃすごく優しいんだけど、2人つきりになると・・・

First Day

20×年9月。テストも終り慌ただしく学校際の準備に追われている。この頃いつも家に帰るのは7時を回ってからだ。今は、ちょうど仕事^{フジノコト}が片付いて友達と帰りの仕度をしている所だ。友達の名前は、藤野琴。琴とは幼稚園の時から付き合いですごく仲が良^い。性格はすごく明るくて、クラスのリーダー的存在・お姉さんタイプだ。

私も琴も仕度を終え教室の電気を消して外に出た。外はもうすっかり暗くなっていた。

2人で並んで話をしていたら琴が思い出したかの様に言った。

「そうだ、珠李さつき職員室で聞いたんだけど転校生来るって。しかも同じ年の男の子。ちょっと嬉しくない？ カッコイイかなー」

「転校生！？ 今の時期に？・・・信じられない。だってうちら高3だよ絶対可笑しいって。」

「うゝん家の事情があつたんじゃない？」

「・・・かな・・・」

と、この話はここで終わりそれほど気にもとめなかった。その後は琴と分かれるまで琴の彼氏の話をしていた。

「じゃあ珠李バイバイ。」

「また明日ねー。」

そう言つて私達は分かれた。

家に帰ると玄関に知らない靴が沢山あった。私の家は、平安時代から続く老舗の料亭でいろんな有名人達が来る。そのせいか、家に帰ったら見慣れない靴があるなんて事には慣れている。

靴を脱ぎ、自分の部屋へ向かつて真っ直ぐ歩き、自屋の扉を開けると信じられないものが眼に入ってきた。顔はよく見えないが誰かが私のベットで寝ているのだ。

おそろおそろ部屋に入り静かに鞆を置きコートを脱いでベットに近づき寝ているだろうと思われる人物の顔を覗き込む。すると、寝ているはず人物と眼が合った。私は、驚きのあまりで言葉にならず、その人物を凝視して固まってしまった。それもそのはず、私のベットで寝ていたのがよりによって男の子だったのだ。彼は、私の様子に気づいたのかニヤッと八重歯を見せて笑うと上半身だけ起こし私に話しかけてきた。

「初めまして。オレ紫藤空^{シドウソラ}っていうんだよろしく」

私に話しかねてきた彼は正直いつてすぐくかつこよかった。極上の黒髪をウルフにカットしワックスで少し刎ねさせた髪、程よく焼けた小顔。それに綺麗な目、鼻、口がバランス良くおさまっている。だが、一番印象的だったのはなんと言っても彼のグレイの瞳だった。大抵の年頃の女の子達だったら彼に無邪気な微笑みをかけられただけで、絶対に一瞬にして恋に落ちているだろう。が、私にしてみれば少しカッコイイかな位だった。

「ああ、えつと宝井珠李^{タカライシュリ}ですよろしく。・・・って！！何挨拶してんだあたし！！てか、あなた何で私の部屋に居るのよ！！何者なの！！」

のん気にちよつとカッコイイ不審者に挨拶をしていることに気づき、慌てて何者なのかを訪ねた。

「ああ、俺？あんたの許婚だよ（にやつ）ヨロシクな珠李」

Second Days

「・・・はい?? なつ何いってんのよ。そんなこと言って信じ
るわけないでしょーが!!!」

そう、信じるわけありません。てか、信じろって言う方が無理な話
です。いきなり現れたちよつとかっこいい男の子、空。彼が不細工
だったら直に警察に通報してるけど、かっこいいので話だけだつた
ら聞く気にも・・・まあなれます。

「いや。本当だから。家の人に聞いてない?」

「・・・聞いてない」

そんな話は一切聞いていないので即答した。すると、

『馬路かよ。だりーなあー』

(・・・はい!? 今のは私の聞き違い? ええ、小さくてよく聞こえ
無かったからきつとそう。)

そう思った私は勇気をだして聞いてみた。

「今、なんていったの?」

するとベットに座っていた彼と目が合った。そして、何故か彼は立
ち上がり私に近づいて来る。

先ほどの彼と何処となく違つ彼の雰囲気には違和感を感じた私は彼と
目を合わせたまま後ろに後退する。

が、そんなに広い部屋ではない為、直に部屋の隅に追いやられてしまった。

（（なっ何なのよ／／（泣　なんで来るの／／！！））

私の目の前にたった彼は一度にやっとなつと笑うと、私を閉じ込めるように私の耳の辺りの壁に手をつきそのまま私の耳に口を寄せて話した。

「そんなに気になるんなら教えて上げてもいいけど・・・高いよ（にや」

甘くてよくとおる彼の声を耳元で聞いたせいで私の顔が段々と熱くなった。またこの状況を打破しようと彼の胸を押してみるが力の差でびくともしない。

「おっ教えてくれなくていいから／／！！お父さんとかに聞くからまず退いて／／！！」

そう言うとかれはにやっとなつて笑ってきた。

「顔まっかだし（笑。りんごみてーだな」

「うっ五月蠅い／／いいから早く退いて」

「・・・」

「なっ何よ／／何か文句でもあんの／／！！」

急に黙りじつと見つめてくる彼にドキドキしながらいう。すると、いきなり腕を引かれた。

「~~~~~／／／！！」

気づいたらやけに近くに彼の顔があり、私達はキスをしていた。

驚いて目を開いたままだった私に彼は気づきゆっくり唇をはなした。そして、

「ご馳走様」　てかさ、キスする時目つぶるっね」

そう満足そうにいうと私の部屋から鼻歌まで歌って出て行った。

彼が私の部屋から出て行くと私は、どさっと倒れるように床に座った。

（（キッキスされたーーーー！！！！）（）（）

今の私の顔は見なくても分かる・・・絶対に真っ赤だ。空、あんたいたい何者よっ／＼／＼！！！！

Third Day

チュンチュンチュンと小鳥のなく声がきこえてきた。

『うっ』と、うなりながらも布団から手を出し時計をつかみ時間を確認する。

時計の針はちょうど6時30分をさしていた。

「うあゝ・・・おきなきや・・・」

低血圧でめっぽう朝が弱いため、なかなか布団から出ることができず毎朝布団のなかでウダウダしてしまう。

今日もまた起きられずに2度寝かと思いい枕に顔をうずくめる。しかし、

「あゝあ、寝ちゃうのかな？そろそろ起きないと学校遅刻だな」

と、いうあの憎たらしい声が頭の近くで聞こえウトウトしていた朱李の眠気をいっきに吹き飛ばした。

カッ！！という効果音が聞こえそうなほど勢いよく目を開き、布団からはね起きる。

すると、もうすっかり制服に身をつつみ準備ばんたんの空がベツトに頬杖をつきニヤニヤと見つめていた。

「なっ なっ なんで！！！！なんで！！私の部屋にいるのよ！！」

「お前がなかなか起きてこねえから起こしにきてやったんだよ、ありがたく思えよ」

と、いうとVサインをつくる。

その余裕な様子を見ていら立ちを覚え、ベシッとそのVサインを朱李は叩き撃ち落とす。

「ついてー・・・何するのかな朱李？こんなことしていいと思っ
んの？せつかく起こしにきてあげたのにお礼もなくこんなことしさ」

「うつうるさいわよ／＼！この居候の分際でえらそうに／＼！」

すると空はジト目で朱李を見つめてきた。

「・・・まあ、今の今のは見逃してやるけど、お礼はきっちりも
らうからな」

「なつべつに」「うるさいよ」

そういうと空は強引に朱李の腕を引き、後頭部を手で押さえ朱李
と深いキスをした。

「／／／つぶ／／」

朱李が苦しくなり声を出すとやっと空は朱李をはなした。

「まあお礼は今度からこれでいいから、よろしくね朱李」

という空は満足そうに部屋を出ていった。

朱李はというと顔を真っ赤にして呆然と空が出ていった扉を見つめていた。

(まっまた!!またやられた————!!!!)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4315a/>

Seet Life??

2010年10月12日21時22分発行